

7 エルフ嫁と商館主の訳ありすぎな新婚旅行

暖かくうららかな午後の昼下がりに。

エミリア手製、しかも俺の好みに合わせての甘さ控えめなクッキーをお茶請けに、のんびりと紅茶を楽しむひととき。

ゆったりと流れるこの時間が好きだ。

「んくん……」

エミリアが俺の肩にもたれながら、目を閉じてこちらにくちびるを向けてくる。

キスのおねだりだ。

苦笑しながら、軽くキスしてやると、エミリアはまた嬉しそうに笑う。

やべえ、この笑顔反則だ。

こっちまでドキドキしてきてしまう。

そんな幸せを満喫する、至福の時間に。

突如。

ざわざわざわ……。

外がなんだか急に蜂の巣をつついたように騒がしくなった。

なんか叫び声というか、怒号というか、そんな声も聞こえる。

「なんだろうな？」

窓の外を見てみるが、こちら側からは騒ぎの様子が見えない。

今日は午前中で書類の処理は終わってしまったし、訪問者の予定もなかったこともあって、午後はエミリアとあっちのお仕事する気満々だったから、こっちには誰も来るなど言い付けておいたから、慌てて誰かが知らせに来ることもよっぽどのが起こらない限りない。

ならば、たいしたことじゃない気もするが。

「私、確認してきます！」

エミリアが部屋から駆けだしていった。

とりあえず、エミリアの報告を待つか。

しばらく窓の外を見ながら、エミリアが戻ってくるのを待つことしばし。

エミリアのぱたぱたぱたと走ってくる、軽めの音の足音がこっちに近づいてきた。

「あなた！」

ドアを開けて入ってきたエミリア。

少しでも早く知らせようとして走ってきたせ

いか、息が乱れたままだ。

「どうだった？」

「どうやら、侵入者らしいんですが……」

「で？ まだ確保できてないのか？」

「どうも、子供みたいなんです。それも、女の子一人だけのようで。狭い場所に逃げ込んでしまっていて、少々確保に手こずっているとのこと」

「子供か……。じゃあ、単なる悪戯か探検か……って感じか。それにしても、女の子一人つてのは珍しいな。早めに確保して、あんまり手荒なことはせず、しっかり注意した上で家に帰すように指示しておいてくれ」

「はい、わかりました」

エミリアがもう一度、部屋を出て俺の指示を伝えに行った。

まあ、たいしたことじゃなかったみたいで、少し安心した。

程なくエミリアも戻ってきて、ティータイムの続きを楽しむ。

「ま、たいしたことないみたいで良かったな」

「そうですね……。侵入者と最初に聞いたときは心配しましたが。あ、一応、身柄が確保できたら

知らせに来てくれるようお願いしました」

「さすがに抜かりがないな」

「たぶん、その方がいいかと思いましたが……」

「ああ、それでいい」

そうして、しばらくエミリアと二人きり、お茶とお菓子を楽しんでいると。

コンコンとドアがノックされて。

「失礼します。先程の件のご報告に上がりました」
ジョゼの声だった。

「どうぞ」

ジョゼがドアを開けて入ってきて、報告する。

「敷地に侵入した少女の身柄を確保しました」

「そうか。で、もう注意して家には帰したか？」

「それなんです……」

「どうした？」

「その娘、どうもエルフ族の娘のようなのです」

「何？」

「ですので、どのようにしたものかと……」

「なるほど……」

これはまた妙なことになったぞ。

だいたい、今のご時世、この街でそんな子供がフラフラ出歩いている時点でおかしすぎる。

9 エルフ嫁と商館主の訳ありすぎる新婚旅行

「どうやってここに来たのか。どういいう目的で来たのか。謎が大量発生だ。」

「あの……本当に、エルフ族の子供なんですか？」

「エミリアもジョゼにそう訊ねる。」

「おそらく……。奥様と同じような耳ですから」

「俺はゆっくりと立ち上がる。」

「ジョゼ。その娘は今どこにいる？」

「はい。屋敷の一室に監視を付けて収容しております」

「その部屋に案内してくれ。いずれにせよ、これは本人に直接事情を聴くしかあるまい。ここでありだこーだ言っても仕方ないだろう」

「分かりました。では、こちらへ」

「ジョゼに案内されて、俺はその少女が収容されている部屋へ向かう。」

「エミリアも緊張した面持ちで付いてくる。」

「そして。」

「こちらの部屋です」

案内されたその部屋へ入ると、確かにエルフの特徴的な耳をした、年齢は12〜13歳くらいの女の子が、ベッドの上に俯き加減で座っていた。

その少女は、人が入ってくる音でこちらの方を見ると。

「お……お姉様あ……っ！」

「エミリアに泣きながら抱きついてきた……。」

「……お姉様？」

「……ってことは、もしかして、この子はエミリアの妹なのか……？」

「こまで来れたもんだ」

「まさか、家出したってわけじゃないわよね。あなた一人じゃ、こんなところまで来られないでしょうし、誰か、護衛が付いてたはず。そうよね？」

「アニーはエミリアの言葉に頷く。」

「ということは、もしかして、お父様が？」

すると、アニーは大事そうに抱えていた鞆から、少し厚みのある書状の入った封書を取り出す。

「これを、お姉様の旦那様に届けるように言い付なけられて……。こここの敷地に忍び込んでからは、一人でお姉様の姿を探してただけど、番犬に見つかって……」

「なるほど。そういうことか……」

「エミリアはその書状をアニーから受け取って、俺に渡す。」

封を切って、中身を確認する。

「ほう……!」

「お父様は、なんと？」

「エミリア、見てくれ。この筆跡は君のお父上のもので、間違いないな？」

「……はい、この字は間違いないとお父様のものです。……あつ……」

ページを繰りながら、素早く書状の内容に目を通すと、エミリアも目を見開いた。

「あなた……!」

その内容とは、現在両国の間で小康状態ながら続いている戦争の講和について、秘密裏に仲介を要請するという内容であったのだ。

3

とりあえず、内容が内容なので、一旦エミリアとジョゼ以外の者は下がらせた。

アニーは、ばあやに世話と、部屋を用意を頼んで、今夜は早く休ませることにした。

執務室に3人だけになると。

「エミリア。外にはもう誰もいないな？」

エミリアはドアの外を覗いて確認して。

「はい、もう他に誰もおりません」

「よし。ジョゼも、その書状の内容は見たな？」

「はい。拝見させて頂きました。これは渡りに船……といったところでしょか？」

「まあな。だが、これは下手に動きが悟られてしまつては何かも水の泡だからなあ……」

「では、お断りになられるので？」

「断るわけないだろ」

「ですよネ」

ジョゼは苦笑い。

その傍らで、エミリアはホツとしたような顔になつていた。

「そんな顔するな。そんなことより、これからこの案件に関してはこの3人だけの秘密というところで、厳守のこと。いいな？」

「心得ております」

ジョゼとエミリアが頷く。

「エミリア、君の妹のアニーに関しては、一部関わってもらう部分もあるだろうが、知らせるのは必要最低限の情報に限る。ここから先の事に関しては、あまり見せない方がいいだろうからな」

「はい、私も同じ考えです」

エミリアもそう言っているなら、これについても問題ないだろう。

さて。

「それじゃ、具体的にどうするか、だが……」

「はい」

「残念だが、俺の立場では、まず、直接政権中枢

の面々に掛け合うこと自体、難しい」

「でしようね」

「でも、手立てはあるん……ですよネ？」

エミリアの問いに。

「まあ、それなりに回りくどい事しなきゃならんがね。とにかく、味方になってくれる有力者を見つかる。そこからだ」

「見つかりますか？」

「分らん」

「え……」

エミリアが固まる。

「奥様。旦那様は勝算もなく、こういった依頼を二つ返事で受けるような方ではありませんよ」

ジョゼが苦笑いしながらフォローする。

「旦那様。クルス様ですわね？」

「クルス様……？ どなたですか？」

「旦那様のいちばん上のお兄様ですよ」

ジョゼがエミリアにそう説明する。

「ウチの実家の現当主だ。ウチの実家は代々閣僚を輩出している家で、兄貴も今は財務卿を務めている。ここは、兄貴の伝手を頼るのがいちばんだ」

「ああ……それで……！」

エミリアにも俺の考えていることが分かったようだった。

「では、旦那様。ご実家の方に面会の予定を調整しておけばよろしいですね?」

「ああ、頼む」

「かしこまりました」

ジョゼが恭しく一礼する。

「よし。とりあえず、今日のところはそんなことだ。二人とも、くれぐれも、この案件の動きについてはこの3人の間以外には他言無用だぞ」

「はい」

そんなわけで、水面下で動き出した俺達だった。

4

そして、夜更けのベッドルーム。

エミリアと二人きりの時間。

エミリアはいつものように、俺が着ていたシャツだけ1枚纏った、扇情的な姿で。

さすがに、エミリアと夜を共にするようになってそれなりに経って、たまらず暴走するというようなことはなくなっただけ。

でも、やっぱりそんな姿はドキドキするし、興奮する。

何度交合を重ねても、また押し倒したくもなるというものだ。

そんな彼女と、裸で寄り添って過ごす。

すごく贅沢な時間だ。

「なあ、エミリア」

「はい。なあに?」

ちよっと甘えるような仕草と声で、返事をするエミリア。

「やっぱり、君のお父上が仲介に俺を指名してきたのは、エミリアの報告だよな?」

エミリアは元々は現在交戦中のエルフ王国軍の将校であり、現在は戦争捕虜の奴隷という身分で俺に買われてここにやってきたという経緯がある。

こうして連日エミリアと夜を過ごしているが、それは性奴隷としてではなく、どういうわけか、普通の使用人と同じように扱っていたら、妙に感謝されてしまい、彼女からの猛烈なアタックに押し切られた感じで、正式ではないが、今では俺の妻としてこうしているというわけだ。

そして、エルフ王国軍の將校には、戦争捕虜の身分にあつても、可能限り情報を収集して本国に送る義務があるのだが。

エミリアもその例に漏れず、最初、うちに来た当初はこっそり情報を送っていたが、俺はそれを知った上で、わざと情報が目に入るように仕向けたりといったようなことをやったりもした。

そんなわけで、さすがにお互い事情が分かかっていて、夫婦になつていいる今では隠れてコソコソということとはなくなつたが。

「おそらくは……。あなたが早期講和を望んでいることは父に伝えていましたから……。ご迷惑でしたか？ あなたはあんまり政治に興味がない感じですし、今回みたいに思いつきり政治に巻き込まれるのはあまり好まれませんよね……？」

俺の問いに、エミリアが少し申し訳なさそうに答える。

「ん、まあ、確かに政治は正直好きになれないが……あちらさんもそろそろ講和を望む動きがあるというなら、うちのビジネスにとつても都合がいいからな。ま、そんなに気にすんな」

そう言つて、軽くわしゃわしゃと頭を撫でる

と、エミリアは嬉しそうに笑う。

「とは言つても……大丈夫なのでしょう？
いけそうでしょか？」

「まあ、やってみないと分からない部分が大きいなあ。幸い、ウチの兄貴は話を通じると思うから、悲観してもいけないけどな」

「そうですね……。私は、隣で応援することしかできませんが……。がんばってくださいね、あなた」
「何を言っているんだ、エミリア。おまえには大事な仕事がある。恐らく出番は少し先になるが、この仕事はおまえの力を借りなければ、成し遂げることではないぞ」

「そうですね？」

「まあ、そんな時はめちゃくちゃこき使うから、覚悟しておけよ」

「はい♪ その時を楽しみに待ってますね」

エミリアはなんかすごく嬉しそうだ。

「こき使われるつてのに、嬉しそうとか、変なやつだな、エミリアは」

「愛する旦那様のお役に立てるのが嬉しくないわけじゃないですか」

エミリアはそう言つて、俺の首元に顔をすり寄

せてくる。

「おまえ、あんまりそんな可愛いこと言うて……その、なんだ……また襲つちまうぞ?」

「私、いつも言ってますよ。いつでも襲つていいですよ。おまけにここは夜の夫婦の寝室です。それ以上は、言わなくてもわかるでしょう?」
穏やかに微笑みながら、エミリアはそう言うてのける。

「ははは……なるほどな」

新婚旅行のける。
殊勝な物言いの裏には、俺を誘う意図もあったってワケだ。

「それなら、こつちも迷う必要はないな」

ありすぎな
「俺はエミリアを仰向けにベッドに組み敷いて、彼女の上のしかかかっていく。」

「さあ、遠慮なくいらしてくださいね……」

主の館商
「そつとエミリアは俺の分身を優しく握つて、自分の場所に導く。」

と嫁
「すつかり熱くぬかるんだ、エミリアの女陰の中へ、自分の分身を突き刺していく。」

エルフ
「ああ……あなたあ……」

15
「俺に貫かれると、エミリアは心底幸せそうに表情をとろけさせる。」

こつちにしても、エミリアのナカは、沼……みたいなものだ。

すつかり填まり込んで、もうこつちやって、エミリアの柔肌を抱きしめて暖かい彼女のナカにずつと入っていたいくらいなんだ。

「ねえ、あなた?」

両手足を俺の身体に絡みつけて、俺のことを包み込みながら、エミリアは俺のことを呼ぶ。

「ん? どうした?」

「今夜も、私のナカで、ゆっくりしていいってね」
エミリアは最近、ベッドの上でいつもこんな事を言う。

「ああ。俺もそうしたいな。エミリアのこと、ずつとこつち抱いてると気持ちいいからな」

「そう言うて、エミリアは嬉しそうに、でも恥ずかしそうに頬を染めて。」

「あの、私も、いつもあなたのおちんちんがここに帰ってきてくれるのを待っていますから……」

「ん? そうなのか?」

「はい……。ここに、あなたを感じると、とても幸せなの……。それに、あなたがナカで暴れると、気持ちよくて……。もう、あなたのおちんちん無し

「じゃいられません……」

「なんか、面と向かって言われるとこっちが恥ずかしいな……」

思わず苦笑してしまう。

エミリアもつられて恥ずかしそうにしながらはにかむように笑う。

けれど、エミリアの愛が感じられて。

同時に、こんなおっさんでも、男として求められているっていうのは、純粹に嬉しいものだ。

「エミリア。俺さ、まあ、嫁になってくれたから、拒みはしないにしても、あんまりおまえのカラダばかり求めたら嫌なんじゃないかとかちよっと思っただけ……」

「ううん、そんなことないわ。これからも、いつでも好きなきに、あなたのおちんちんを、私のカラダに教え込んでくださいね。大丈夫な日は、分かるようにしておきますから。私、待ってますからね」

エミリアは、普段の仕事の時とかでも、襲っても大丈夫なときは、決まったアクセサリーを身に付けて、分かるようにしてくれている。

「ああ。遠慮なく襲わせてもらおうぞ」

「はい……♪」

自分が襲われる……というか、今まさに襲われるのか……というのに、エミリアは嬉しそうだ。

そんなにまで俺のことを求めてくれる、エミリアの気持ちに応えてやろう。

そう思い、彼女の胎内を遠慮なく抉っていく。

「ああっ、ああんっ、いい、きもちいいっ！ あなたあ！」

甘く響くエミリアの歡喜の喘ぎ。

幸せそうに、頭を振り乱しながら俺のペニスの突き上げてくる感触を味わっているようで、突き上げる度にぎゅっとキツく抱きついてくる。

そんなエミリアのナカの感触を味わいながら、俺は繰り返しその奥を責めていく。

そして、その夜も夜が更けるまで、何度も彼女の胎内を俺の精で汚していく……。

胎内と下半身を俺の精で汚されたエミリアは、うっとりとして幸せそうに微笑むのだった。